

Educo

地球時代の教育情報誌 **エデュコ**

No.19

2009年 春

2 巻頭インタビュー

俳優 国連開発計画親善大使

紺野 美沙子さん

4 知っておきたい教育 NOW

新学習指導要領における「言語活動」
府川 源一郎
横浜市の「小中一貫教育」について
横浜市教育委員会

8 世界きょういく見聞録

発展途上国における ICT 教育
赤堀 侃司

10 地球となかよしトピックス

「ブックワールド」へようこそ！
さいたま市立文蔵小学校

12 インフォメーション 北から南から

14 地球となかよしゼミナール

環境教育のベースは
自然と人に対する豊かな感性
坂本 征文

15 コラム いまどきコドモ事情

先生も深呼吸を
香山 リカ

16 ほっとな出会い

動物写真家
小原 玲さん





紺野 美沙子さん

(俳優・国連開発計画親善大使)

この地球にともに 生きる人たちのことを もっと知ってほしい



PROFILE

紺野 美沙子

東京都出身。慶應義塾大学文学部卒。1979年、俳優としてデビュー。国連開発計画親善大使として、カンボジア・パレスチナ・ブータン・東ティモール・ベトナム・モンゴル・タンザニア他を訪問。*国連開発計画 (United Nations Development Programme) …開発途上国の民主的な政治や貧困削減、環境問題などのためのプロジェクト策定や管理を行う国連総会の補助機関。

98年に国連開発計画(UNDP)の親善大使任命を受け、10年以上親善大使を務めておられます。

実際に開発途上にある国々を訪問すると、本当に「百聞は一見にしかず」という感じです。

危険な湿地の掘っ立て小屋にたくさんの方が住んでいる。子どもがけがをしても、病院に行くお金がない。お母さんは、高利のお金を借りて病院に連れて行く。借金地獄から抜け出せなくなり、子どもを売ってしまふこともある……。人身売買の現実を知ったときには、大きなショックを受けました。

日本でも、テレビ報道などを見

て、大変だなとは思われる方も多いのですが、気にはなっても、遠い外国のことだし、といつの間にか忘れてしまう。でも、実際に現場を

訪れてみると、こんな悲惨なことが同じ地球上で起こっているという現実を否応なくつきつけられます。私の役割は、日本では当たり前前の生活が、一歩外に出ると全くそうではないということ、現実に見たこと、感じたことを伝えることだと考えています。日本のような豊かな生活が世界のスタンダードではない、ということを知ってもらい、ともに地球に生きていく人々について考えるきっかけにしてもらいたいという思

いが、親善大使の活動を続ける力になっていきます。

アフリカやアジアの途上国などを毎年訪ねておられます。

08年に、親善大使としての10年間に見たこと、感じたことをまとめた本を出版しました。本を出そう！と強く思ったきっかけは、ガーナで出会った孤児の少年です。

アフリカでは、HIV／エイズが大変な猛威を奮っています。その少年に、「僕の両親は突然エイズに連れていかれた。僕はすごくエイズが憎い。でも、国連の親善大使が来てくれたからもう大丈夫」と言われた

んです。そのとき、私一人では何もできない、どうしよう、でもここに助けが必要な人がいる、と胸がいっぱいになりました。悩みましたが、私には、すぐこの状況を改善する力はないけれども、伝えることができ。それで、現状を伝える本を出してみんなに知ってもらいたい、印税は寄付し、少しでも環境の改善に役立てたい、と考えたんです。

ガーナの、私が訪れた地域の人たちは、多くの富を得たら、独り占めせずに「みんなに分け合おう」という考え方なんだそうです。お互い様とか「情けは人のためならず」とか、昔の日本の地域社会に似ているかも

新学習指導要領

新学習指導要領における「言語活動」



横浜国立大学教授
府川 源一郎

各教科で重視される「言語活動」

新しい学習指導要領では、各教科で「言語活動の重視」の方針を打ち出した。たとえば、中学校社会科の「地理的分野」には、「内容の取扱い」に「観察や調査の結果をまとめる際には、地図を有効に活用して事象を説明したり、自分の解釈を加えて論述したり、意見交換したりするなどの学習活動を充実させること。」とあり、また中学校音楽にも「鑑賞」に「音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取って聴き、言葉で説明するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。」という文言がある。ほかの教科においても「言語活動」が重視されており、これ

まで国語科の専売特許だと思われてきた「言語活動」が他教科にも波及している。

その原因は、直接には、2007年11月に、中央教育審議会初等中等部会教育課程部会が「教育課程におけるこれまでの審議のまとめ」を出したことである。そこには、以下のような文言があった。「各教科等における言語活動の充実とは、今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な改善の視点である。」続いて、国語科の重要性とその役割を述べた後「各教科等においては、このような国語科で培った能力を基本に、知的活動の基盤という言語の役割の観点からは、例えば」と、各教科で行うべきさまざまな言語活動を挙げている。続けて、「各教科等におけるこのような言語活動の充実には当たっては、特に教科担任制の中・高等学校の国語科以外の教師が、その必要性を十分に理解することが重要である。」と、言語活動を取り入れることを求めた。この方針が、新しい学習指導要領で具体化されたわけである。

PISA調査の影響

このことに関して、文科省のホームページの「学習指導要領改訂の基本的な考え方に关するQ&A」を見ると、次のように解説されている。

「Q. 今回の改訂では言語を重視するとし

ていますが、具体的にどういうことですか。

A. 言語は、知的活動（論理や思考）やコミュニケーション、感性・情緒の基盤であることから、国語科だけでなく、各教科等でレポート作成や論述を行うといった言語活動を指導上位置付けることが求められます。また、言語活動を支える条件として、教材の充実や読書活動の推進なども重要です。」

このQ&Aには直接に書かれてはいませんが、新しい学習指導要領が「言語活動」を強調したのは、PISA調査などの結果で日本の学習者が弱い部分だとされた「読解力」の育成を企図したためであることは明白である。知られているようにPISA調査の「読解力」は、次のように定義されている。

「読解リテラシーとは、自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発展させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力である。」

このように、PISA調査では「読解力」は生徒自身が社会生活に参加するための手段





ガーナ マンヤ・クロボ地区にて。子どもたちは皆、エイズで親を亡くしている
写真提供 篠田伸二／UNDP 東京事務所

しれませんね。特にその首長さんが、自分の村の子どもたちは自分の子どもと同じだからみんな助けよう、と頑張っているからって、少し経済的に余裕のある家に「地域の力で子どもを救おう」と呼びかけていました。自分の子が何人もいるのに、新たに孤児を1家庭で6人も引き取って面倒をみている。「地域の子は自分の子と一緒に」。日本では薄れてきた地域社会の助け合いの力の目の当たりにしました。

訪れた各地で、子どもたちにたくさん話を聞いてもらっていますね。

東ティモールに行ったときには、

こんなに貧しい地域があるのか、と愕然としました。子どもたちに「大人になつたら何になりたい？」と聞いても、だれも答えません。テレビも、もちろんインターネットもないし、外から入ってくる情報がないから、「なりたくないもの」というイメージがわかないんですね。

では、情報がなくてかわいそうだと、情報を一方的に与えればいいのか。また、衣食住が十分でないならそれを整えてあげればいいのか。UNDP が言っていることでもあるんですが、私は「ものをあげて終わり」ではないということ、強く訴えたいんです。

大切なのは、一人一人に選択肢がふえるということ。毎日の生活で、食事を選ぶことができるか。そして、どういう勉強をすることを选ぶか。どんな職業を选ぶことができるか、と。

なくなつたらまたくださいということを繰り返すのではなく、ものや情報をどうやって使うのか。将来それをどのように活用していくのか。そういったことを一緒にやってみるために、やはり、世界中の子どもたちが最低限の初等教育を受けられるようになることが最も大切でしょう。それを実現するのが大人たちの

役目だと思います。どこの国に行っても、学校に行きたい、学びたいという純粋な、強い思いは皆同じなんです。ガーナでは、子どもたちに「あなたの大切なものは何？」と聞くと、口をそろえて「教育」と言っていたのがとても印象的でした。

子どもはすぐくまじめで純粋。これは途上国でも日本でも同じです。日本の子どもたちには、こういう暮らしをしている人たちがいるということを知ってほしいし、関心を持つてもらいたい。私が見聞きしたこと

を一生懸命伝えることで、もしかしたら、将来は世界中の人を助けるために働きたい、困っている人がいない世界にしたい、と思う子がいるかもしれないなど。同じ地球上に生きる者として互いを認め合うということ、大げさかもしれないけれど、それが将来の世界の平和につながるのではと思っています。そういう小さなきっかけになればと、各地で講演をさせていただいています。

俳優としての仕事や親善大使としての講演などの他、朗読やナレーションも積極的にこなされています。

金子みすゞや志賀直哉など、多く

の作品を朗読しています。たくさん映像があふれている今の世の中で、声だけをメインに、一つの物語を、一つの空間で集中して聞くということは、想像力が要求されることです。一人一人のイメージの中には、いろんな世界があり、自由がある。一つの話を、聞いてくださつた方一人一人がどういうイメージをしてくれるんだろうと思いをさせながら読むというところに、朗読や読み聞かせの魅力を感じています。

今後、子ども向けの読み聞かせの活動ももっとしていきたいですね。子どもたちが自分なりのイメージをつくっているんだな、と感じるときが一番うれいんですし、また話したい気持ちになります。季節や行事などに合わせた朗読で、自由にイメージをふくらませ、たくさん想像をしてもらえたらいいなと思います。

■著書紹介
ラララ親善大使
紺野美沙子 著 1,470円 小学館



国立教育政策研究所
平成 20 年度 全国学力・学習状況調査報告書のポイント
(平成 20 年 11 月)より抜粋

○正答の状況：今回出題した学習内容に係る知識・技能を活用する力に課題がある。

A 問題：知識 B 問題：活用

小学校調査

国語		算数	
A 問題	B 問題	A 問題	B 問題
65.6%	50.7%	72.3%	51.8%

平均正答率

中学校調査

国語		数学	
A 問題	B 問題	A 問題	B 問題
74.1%	61.6%	63.9%	50.0%

平均正答率

● PISA 調査における「読解力」国際比較

順位	2000 年	2003 年	2006 年
1	フィンランド	フィンランド	韓国
2	カナダ	韓国	フィンランド
3	ニュージーランド	カナダ	香港
4	オーストリア	オーストラリア	カナダ
5	アイルランド	リヒテンシュタイン	ニュージーランド
	8 日本	14 日本	15 日本

これからの日本の教育

これまでともすると「受容型」の教育の傾向があった日本の教育は、これからは「発信型」に転換していかなければならないと考えられている。また、「知識基盤社会」と呼ばれる社会に向かっていく現在、PISA 調査

のような「読解力」が必要だという認識は、多くの識者の間でも共有されている。文科省の行っている「全国学力・学習状況調査」においても、「知識」「活用」の二部門に問題が分けられており、そのうちでも「活用」の力の育成に注目が集まっている。

つまり、多くの情報が飛び交う現代社会の中では、それらの情報を蓄積しそれを記憶することよりも、情報同士を組み合わせたり比較したりして、その場にあわせていかに効果的に「活用」できる力を育てていくのかというところに、これからの教育の軸足を移していく必要があるのである。

おそらくそうした能力の中心に言語能力があるということは間違いないだろう。しかし、それは国語科だけで身につけることはできない。学校教育の中では、各教科にさまざまな言語によって自己表現したり、説明したりする場がある。また、各教科では、さまざまな資料を読み解き、それを説明したり、記述したりする多くの機会がある。そうした言語活動の場や機会を、従来よりも意識的に設定することが重要になってくる。また、そこで多くの資料を用意したり、図書館を活用したりするような学習が組織される必要がある。

新しい学習指導要領では、これからの教育の方向を見通して、自ら課題を発見し、それを主体的に解決していくような学習者を育てようとしている。そうした目的を実現するための効果的な方策の一つとして、「言語活動の充実」を提起したのである。

いまでもなく、各教科にはそれぞれ固有のねらいがある。たとえば、理科では科学的なものの方の育成、保健体育では運動力の育成と体力の向上、などが、それぞれの教科目にとってもっとも大事な目的である。言語活動の充実というかけ声に呼応することは大事だが、教科固有の目標を実現するためにこそ言語活動を取り入れるのだ、ということも忘れてはならない視点だろう。

小中一貫教育

横浜市の「小中一貫教育」について

横浜市教育委員会

横浜市の小中一貫教育の考え方

本市では、「横浜教育ビジョン（平成18年10月策定）」で示した「知・徳・体」（三つの基本）と「公（公共心と社会参画意識）・開（国際社会に開かれた心）」（二つの横浜らしさ）で示す「横浜の子どもの姿」の実現を目指している。また、学校教育においては、「横浜版学習指導要領 総則（平成20年3月策定）」の中で義務教育9年間の連続性を図った「小中一貫カリキュラム」に基づく教育の推進を明示し、「ビジョンの理念に向けた新たな義務教育の在り方を打ち出した。

横浜市の小中一貫教育は、敷地や校舎を共

有したり学区や通学区区域を変更したりすることなく、既存の中学校区を基本として、「小中一貫教育推進ブロック」を設定し、小中一貫カリキュラムの導入に向けて、小中学校が連携、協働した取り組みを推進する。小中学校の教職員の人的交流を促進したり、児童生徒が授業や行事、部活動などで交流したりして、学力向上や児童生徒指導の充実を目指している。

「小中一貫カリキュラム」の概要

横浜市の小中一貫教育を支える「小中一貫カリキュラム」は、「横浜版学習指導要領 教科等編（平成21年3月策定・（株）ぎょうせいより出版）」において各学校へ提示する。すべての教科等において「知・徳・体・公・開」の視点での指導方針の分析、9年間の指導で身に付ける資質・能力とともに、すべての単元・主題等において学習指導要領で示された内容を「基礎的指導内容・指導方法」とした上で、基礎的指導内容が不十分な場合の「補充的指導内容・指導方法」、学習を深めたり広げたりするための「発展的指導内容・指導方法」として位置付けている。

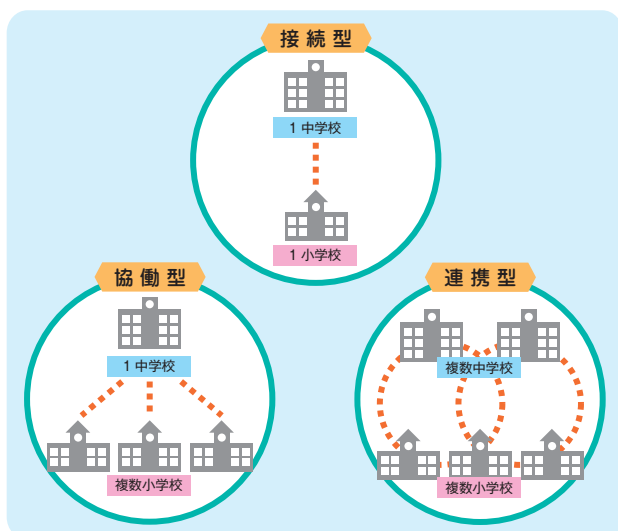
これによりブロックで小中一貫カリキュラムを編成するとともに、小中学校教員が互いの校種の指導内容・方法を把握した上で、各多様な児童生徒に対応した連続性の指導を実

現しようとしている。

「小中一貫教育推進ブロック」の取り組み

「小中一貫教育推進ブロック」は、中学校区を基本とした小中学校で構成される。地域の実態に応じて、1中学校と1小学校の「接続型」、1中学校と複数小学校の「協働型」、複数中学校と複数小学校の「連携型」など（左図参照）があり、それぞれのブロックの課題解決に向けた取り組みを進めている。

平成20年度からは、28の「小中一貫教育推進ブロック」内の小中学校を「小中一貫教育実践推進校」として85校を委嘱し、各ブロッ



クには非常勤講師の加配（1名）を行っている。また、小中学校間の連携・協働作業を支えるために推進費を配当している。

今年度委嘱した「小中一貫教育実践推進校」では、小中一貫カリキュラムの導入に向けて小中教職員の交流・連携を促進し、教員の出前授業（例えば、小学校英語活動や高学年理科指導での中学校教員の授業〔写真参照〕など）や情報交換会、合同授業研究会、課題研修会等を実施して授業改善を促進している。双方の学校の教員が互いに兼務辞令を受けて、交流を日常化しているブロックも多い。

また、児童生徒指導担当教員の交流の促進や児童生徒指導研修会の合同開催、さらには小中合同行事の実施等、児童生徒の交流促進



中学校理科室で、中学校の教員による6年生の理科の授業

によって小中学校間のギャップから生じる不登校問題等、今日的な児童生徒指導上の課題の解消を目指している。このような取り組みを始めて、中学校1年生での不登校出現率が大幅に減少したというブロックからの報告も寄せられている。

「小中一貫教育推進ブロック」の取り組み成果

小中一貫教育を推進している学校からは、ブロック内で生徒指導上の小中共通理解が進み、不登校生徒等へのきめ細かな対応の充実。

- ・ 中学校の出前授業や小中相互の授業参観により、実態把握が図られ授業改善の推進。
- ・ 小中学生の交流により、小学生には中学校入学に対する不安や中1ギャップの減少。
- ・ ブロック内で小中一貫性のある指導など、学年間をつなぐ系統的かつ効果的な指導の充実。

・ 経年比較で横浜市学習状況調査の到達度が向上（一部の中学校）。

などといった成果が報告されている。中でも、小中学校の教師間の意思疎通、課題認識の共有化が教育活動の改善に大きく寄与していることを、本取り組みの成果として重視したい。

一方、課題としては、

・ 教員の負担として、事務連絡や調整に時間がかかり、教職員のコミュニケーションをとる場面の設定方法。

・ 小中一貫カリキュラム推進のため連携する対象中学校が重なる小学校については、基本的にどちらか一校の中学校とチームを組めるブロックが必要。

などが報告され、今後、解決へ向けた教育委員会と学校との連携が不可欠である。

このような内容については、小中一貫教育推進フォーラム（平成20年11月開催）や横浜教育実践フォーラム（平成21年1月開催）などで市立学校に情報として発信し、実践に寄与させている。

今後の取り組みの方向

来年度は「小中一貫教育推進ブロック」を全市で展開し、夏以降はすべてのブロックにおいて、小中一貫カリキュラム編成に着手する。また、非常勤講師加配のブロックを35ブロックへ拡充して、先導的な取り組みを全市に発信していく。

最終的には、中学校の学習指導要領全面実施の平成24年度までには、市内全小中学校において小中一貫カリキュラムに基づく教育を実施することを目指している。

● 横浜市教育委員会

<http://www.city.yokohama.jp/me/kyoiku/>

世界 きょういく 見聞録



From Sri Lanka
Vol.4
From Jordan



世界には、さまざまな学びのプログラムやプロセスがあります。今回は、ICT がどのように教育現場で使われているか、開発途上にある2国を紹介します。

発展途上国における ICT 教育

私は数年前に、JICA（国際協力機構、Japan International Cooperation Agency）の仕事で、インドのすぐ南に位置する島国、スリランカの理数教育援助に関わったことがある。また、中東のヨルダンの教育支援にも携わった。そのときに見たこと・感じたことから、ICT 教育が何をもたらすのか、その可能性について考えてみたい。

白鷗大学教育学部教授

赤堀 侃司

スリランカの教育

インド半島の南東に位置する島国、スリランカ民主社会主義共和国は、津波の被害と国内紛争で民族が戦っているというニュースで、国名を覚えておられるかもしれない。特産のセイロン紅茶の名でわかるように農業国であるので、国としては、近代工業や情報産業を盛んにして、国力を上げたいと思うのは、施策として当然である。そのためには、理数教育を振興する必要が生じて、JICA が教育援助を行うことになった。

その実情は、右の**写真1**で示す通りである。地方と都市部の学校間格差が大きく、地方にあるこの学校では、屋外で粗末な黒板で授業をしている。このような場合の教育支援では、まず施設設備を整えることが最優先であることは論をまたないが、その設備の中に、ICT があった。私は、反対であった。電気や水道や校舎などの基本的なインフラ整備を初めに行うべきであり、ICT の整備などは、もっと後



でよいという考えであった。この私の考えも当然であり、JICA のスタッフの賛同を得た。しかし、スリランカ政府の強い要請もあって、モデル学校に1台のコンピュータを導入した。

写真2（右ページ左上）は、ICT 整備という教育支援の結果、学校がどのように変わったかを、モデル学校の教員が発表する大会の光景である。それは、信じられないような驚きであった。表計算ソフトや、パワーポイント等のプレゼンテーションソフトを使いこなし、教育支援を受ける前後の変化を示した見事な発表をしている。私は、学校訪問の経験から、特にこの国の地方の学校には、「統計」という概念が欠けていることを痛感していた。子供の出席管理、成績管理、教員の出席や早退の管理など、きわめてルーズだったからである。だが、この発表では、数値の変化をきちんとグラフで表示しており、このことは、その基礎となる「記録」ができていることを意味している。ICT という道具を持ち込むことによって、情報の収集、整理、判断をし、表現するという、情報の活用が行われたということであり、それによって、何をすべきか、どうしたらいいか、が見えてきたからではないか。

当然であるが、コンピュータを先生方に渡しただけではなく、JICA のスタッフが、コンピュータの操作、ソフトの使い方など、きめ細かい研修を行ってきた。その使い方や発表の仕方やレベルは、まる



写真1
スリランカの
地方の学校風景



写真2
スリランカでの、
先生方の発表風景

で日本での先生方の研究発表と同じようなレベルという印象を受けた。

ICTは単なる道具であるが、道具とつきあうことを通して、人はどうしたら教育を改善できるかという問題解決の仕方を学んでいるのではないか。ICTの道具性は、先進国も発展途上国も、同じレベルではないだろうか。

ヨルダンのICT教育

中東の国、ヨルダン・ハシエミット王国は、周辺の国と異なり石油の産出国ではないので、経済基盤は脆弱で、先進国からの支援を必要としている国であり、JICAも教育支援をしている。



ヨルダンのICT教育は始まったばかりで、情報化は進んでいないと言われている。しかし学校訪問を行い、ICTの授業を参観して驚いた。写真3は、その授業風景である。小学校の先生の机にパソコン



写真3
ヨルダンの授業
風景

があつて、プロジェクターで黒板に投影して、子どもたちが学習をしている。黒板は、白いスクリーンを置かないでも投影できるので、授業は自然に進む。算数の学習であるが、教材はデジタルコンテンツで、アニメーション教材を用いており、子どもたちは理解しやすくなっている。

このような授業のスタイルは、日本の、ICTを積極的に取り入れている学校の姿とまったく同じであった。経済の発展は途上ではあるが、ICTの道具としての有効性をいち早く認め、先生たちが活用しているのである。このように考えると、経済的な差や価値観の差、政治などの仕組みの差はあっても、ICTを用いた教育の仕方は、どうしたら子どもたちが「わかる」だろうかという発想である点で、発展途上国も先進国も同じなのではないか。授業を効果的に補完・改善するためには、どのように道具としてICTを用いるかを実践しているということである。🌀

参考資料

『教育展望』2008年10月号 (財団法人 教育調査研究所 刊)

特集「学校教育におけるICTの活用と情報モラル」
赤堀侃司「新しい教育に向けた情報教育の在り方」より抜粋

ICTの利用は、教科の目標を達成するため、教務の処理をするためなど、道具としての活用である。(中略) ICTを、いかに教育に活用するかは、「わかる授業」の実現に関連している。新学習指導要領では、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」、「思考力・判断力・表現力等の育成」という両輪を学力としてとらえている。(中略)

思考判断などを伴う応用力を育てるためには、自分で情報を収集し、整理し、判断して、表現する情報活用能力が重要で、いかに育成するかが求められる。小学校学習指導要領解説・総則編では、「各教科等においては、国語科における言語の学習、社会科における資料の収集・活用・整理、算数科における数量や図形の学習、理科の観察・実験、総合的な学習の時間における情報の収集・整理・発信などコンピュータや情報通信ネットワークなどを活用すること」と明記している。これまでの学習指導要領では、情報活用能力の育成は、主に総合的な学習の時間で、「例えば国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題」として取り上げられていたが、新学習指導要領では、教科を横断してその育成を目指している。



毎週木・金曜日は放課後開放の日。ボランティアさんがわからない字を教えてくれたり、宿題を見てくれたり、お世話をしてくれます。「ブックワールド」は、地域の方や保護者も気軽に出入りできるよう、校舎とは別棟の独立した造りになっています。

さいたま市立文蔵ぶぞう小学校

「ブックワールド」へようこそ！

「本を読むことが好きですか？」という問いに、9割近くの子どもが「好き！」と答える、さいたま市南部の文蔵小学校。平成17年度、さいたま市教委の「特色ある学校づくり―学校図書館地域開放事業」の指定を受け、地域の方々も巻き込んで、本好きな子どもたちを育てています。



ブックワールドのキャラクター、「よむぞう」くん。保護者のボランティアがデザインしてくれました。

ボランティアのカ

「新刊が借りられるように早く来たんだよ！」「予約してた本、もう来た？」授業が終わると、放課後開放を行っている「ブックワールド」へ一斉に子どもたちが駆け込んできます。お目当ての本に没頭する子、宿題を広げる子、司書の先生やボランティアさんに笑顔で話しかける子。ここは、図書館であると同時に、「文蔵っ子のたまり場」です。

ブックワールドの大きな支えは、地域のボランティア。保護者や広報を見て応募した地域の方、卒業生の親御さんなど、数十名が活躍中。「ブックワールドは、地域の人のた

まり場であることもめざしているんですよ」とボランティアさん。子どもたちは、本に親しむとともに、ボランティアに宿題を見てもらったり、友達つき合いの悩みを話したり、様々な人とふれ合うことで人間関係も学んでいるのです。

「すてきな本を読んだよ！」「読書郵便」

文蔵小では、自分の読んだ本の感想・紹介を保護者や地域ボランティアへ届ける「読書郵便」に取り組んでいます。見知らぬ人に手紙を書き、気持ちを伝えるのはなかなか難しいこと。でも、お返事が来るのがうれしくてたまらない子どもたちは、読んだ本のすてきなやさや自分の気持ちが

(右) 授業が終わり、大勢の子どもたちがブックワールドにやってきました。「年間100冊以上借りる子どもいます」と、司書の竹内先生。

(左) 開放日には、お兄ちゃんやお姉ちゃんに絵本を読んでもらう未就学の子どもの姿も。「これから入学する子どもや保護者にも学校に親んでもらいたいんです」と先生たち。



▼子どもたちとボランティアさんとの交流、読書郵便。



▲教室を出てすぐの一角にある「ミニブックワールド」には、教科書に登場する本や図鑑などもそろっており、すぐに授業に役立ちます。例えば中学年のコーナーでは、国語の「辞書の引き方」の単元に合わせ、国語辞典や漢和辞典がずらり。クラスみんなで使えます。

▲ボランティアは、「できるときに、できる範囲で」。この日は、地域のボランティアさんによる読み聞かせが行われていました。学校まで来られなくても「読書郵便のお返事を書く」などの活動があり、無理なく参加できます。「子どもたちの喜ぶ顔を見るのが一番です」とボランティアさん。

手の届くところに本がある

校舎の各階には「ミニブックワールド」が設けられており、教室を一步出ると、目の前に、たくさんの本があります。カーペット敷きのスペースは、いつも子どもたちでいっぱい。入学したときから本は身近にあるものであり、友達どうしで読み合い、紹介し合うという感覚が身につけている文蔵っ子。

司書の竹内先生は、「本を手にとるきっかけさえあれば、みんなどんどん読むんですよ」とうれしそうです。

学校全体でブックワールドを活用

竹内先生によると「文蔵小では、先生たちの顔が常にブックワールドに向いているんですよ」。担任の先生たちと図書館が緊密に連携しているといいます。授業にどんな本が役立つか、調べ学習などに何が使える

のか相談し合い、他校や市立図書館からも借り入れてそろえます。使用時期が重なるため、使えないクラスが出ないように学年ごとに箱に入れて貸し出します。学年で横の連携をきちんととり、それに図書館が協力する。この体制がしっかり機能し、充実した調べ学習が行えているのです。

文蔵小では「図書館教育部」が組織されています。先生たちはこう話します。「先生自体が本を好きにならないとその学級の子どもは本好きにならないですから、先生も皆『お勧めの本』カードを書きます。朝会するときにも、校長先生が絵本の読み聞かせや本についてのお話をします。先生が自分の好きな本を一生懸命勧める姿を見ると、友達どうしでもこの本のどこが好きか、教え合う雰囲気が生まれるんです。文蔵小のいいところはまさにそこだと思います。」

先生たちの次の目標は、各学年で読むとよい「文蔵っ子のおすすめ本」を選定してスタンプカードを作り、いろいろな本に目を向けてもらうこと。子どもたちの読書意欲は、ますます刺激されそうです。

▼文蔵小学校

<http://buzo-esaitama-city.ed.jp/>

愛知県

世界一の笑顔 みんなが主役

「やまびこフェスティバル2008」

◆ 豊明市立双峰小学校校長

新井 宏幸

双 峰小では、毎年、1年生から6年生まで、各学年の児童2～3名で構成する24の「やまびこグループ」をつくります。

日ごろの清掃は「やまびこグループ」で行い、上級生は下級生に掃除の仕方を教えます。上級生の教えに従い、下級生が一生懸命掃除をしている姿をみると「いいなあ」と感動を覚えます。

1カ月に1回程度「やまびこ遊び」の時間を設定し、「だるまさんがころんだ」「どろけい」「ドッチビー」などを、上級生が下級生に気遣いながら楽しんでいます。また、児童が選んだグループ競技を全校で楽しむ「やまびこゲーム集会」も企画されます。読書旬間には、上級生が下級生に絵本を読み聞かせます。

1月末に開催するやまびこ活動の総まとめ「やまびこ子どもまつり」は和太鼓クラブの演奏で始まります。グループ毎に工夫を凝らしたお店を出し、他のグループの出店を回って遊びます。PTAや教育ボランティア、地域の方々のお店もあります。

今年度は、土曜日に開催し、家族で会食後、セントラル愛知交響楽団を招いてコンサートを開くことができ、多くの保護者や地域の皆

様にも楽しんでいただくことができました。オーケストラの演奏で上手に大合唱できたことに子どもたちも大満足でした。

双峰っ子は、仲間や家族、地域の方々とのふれあいを通して、人と人のよりよい接し方を学んでいます。双峰小学校がこれからも双峰っ子のふるさとであり続けてほしいと思います。



INFORMATION

北から

全国各地のさまざまな取り組みを紹介します。

北海道

エネルギーと地球環境について 楽しく学ぶ場を

「企業の社会貢献」

◆ 北海道ガス株式会社広報グループ

成田 和彦

私 たちの生活の中で、何気なく使っているエネルギーは、地球温暖化をはじめとする地球環境問題と密接な関係にあると言われています。北海道ガスでは、エネルギーを供給する企業としての責任を果たすため、環境調和型社会の実現に向けた取り組みを行っています。その一環として、子どもたちにエネルギー問題や地球環境問題について正しく理解してもらうための次世代教育活動を積極的に行っています。

子どもたちにはまず、今起きている問題を「身近に感じてもらう」こと、そして「楽しく学んでもらう」ことが大切と考えています。この考えに基づいたエネルギー環境教育の派遣授業プログラム「北ガス・サイエンスショー」は今年で4年目を迎え、これまでたくさんの学校を訪問しました。液体窒素を使った冷熱実験で、温度による物質の変化の不思議とおもしろさを知ってもらうなど、エキサイティングで楽しい実験を通じて科学のおもしろさに触れながら、地球環境問題やエネルギーの大切さについて学びます。

北海道洞爺湖サミットが開催され、行政等の積極的な環境啓蒙活動との相乗効果もあって、北海道の地域社会全体における環境意識

はさらに高まっており、子どもたちにおいても同様の現象が起きていると感じます。こうした子どもたちの環境意識をさらに高めるため、そして何より次世代の子どもたちの明るい未来を築くためにも、エネルギー環境教育を進めていくことが必要だと考えています。

今後も、サイエンスショーなどをおして子どもたちの心をつかみ、たくさんの喜びを与えながら、エネルギー問題のこと、そして地球環境問題について教え伝える場を積極的に提供したいと思っています。



教師に授業力、子どもに学習力！

「館小モデル」での取り組み

◆ 館山市立館山小学校教諭

菊間 俊徳

本校では、児童の学習力向上のため、授業以外での取り組みも進めています。

「甲子園プロジェクト」は4年生以上が学年の枠を取り払い、同じ条件で競う学習競技です。漢字の習得を図る「漢字甲子園」、計算力の向上をめざす「計算甲子園」、地理的知識の習得を図る「地図甲子園」、走力を競う「スプリント甲子園」があります。どの「甲子園」も、参加は自由で、競技性を楽しみながら、学習意欲と学習に対する自主性の向上を図る仕組みです。また、理科自由研究の研究内容とプレゼンテーション力を競う「館小サイエンスグランプリ」もあります。一定の結果を残した児童は、全校児童の前で表彰されます。参加児童は年々増加し、児童の学習力の向上に一役買っています。

「サテライト経営」には、かけ算九九の定着をめざす「九九道場」やわり算の筆算の定着をめざす「わり算道場」があります。休み時間や給食準備の時間を活用し、特別教室に

ある道場で児童は練習を積みます。また、道場の掲示物や展示物で、いつでも自主的に学習できます。算数の技能の定着と学習意欲の向上を図る仕組みです。がんばる児童の姿はやる気に満ち溢れ、輝いています。

「進んで学習する子どもを育てるために、子どもの『学習力』を向上させたい。そのために、私たちの『授業力』を向上させたい。」このずっと変わらない思いで、実践を重ねてきました。その思いや実践など教育に対する本校のスタンスが「館小モデル」です。

私たちは、この「館小モデル」のもと、21年度も「授業力・学習力の向上」をテーマに2回（10月・11月）の公開研究会を開催します。ぜひ、ご参加ください。

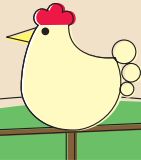


授業研究で同僚性を高める学校

◆ 宇都宮大学教育学部教授

松本 敏

南から



現職派遣の先生たちへの指導助言を行ってきたが、個々の教師の力量形成が学校でどのように子どもたちに還元されるのか、見えにくかった。9年前に、専門の社会科教育の壁を飛び出て、学校における授業研究の全体に関わる機会が訪れた。同じ学校に年数回助言に行くことで継続性のある学校改善・授業改善を図ろうというものである。

以後、学校数も訪問回数も増え続け、ピーク時には年間100回をこす研究授業に関わってきた。その経験からわかってきたのは、授業と子どもについてじっくりと話し合う授業研究を通して教職員の良い相互作用が高まり、ポジティブに動く学校になっていくことである。授業について考え、語り合うことは教師にとってこの上ない喜びと向上心の源泉である。

このことを実感した教師集団は、しなやかな強さ、進んで助け合う思いやりを発揮する

ようになる。その教師集団の姿は児童生徒に確実に伝わり、生徒指導や学校行事など多方面に好影響をもたらすのである。予定の年数を終えても、先生たちから「また来年も続けたいので来てください。」と言われる学校が多い。(掲載の写真は、付箋紙のメモをもとに、頭をくっつけ合うようにして語り合う教師の姿である。)

学校がよく機能するための要因を20年前に特定し「同僚性」と名付けたのはアメリカのリトル氏だが、その同僚性は本来日本のお家芸であり、今や世界が日本の授業研究に注目しているのである。



地球となかよし ゼミナール

子どもたちのメッセージに学ぶ

教育に関するキーワードをクローズアップする
「地球となかよしゼミナール」。

今回は、北海道旭川市での実践から、「環境教育」について考えます。

環境教育のベースは 自然と人に対する豊かな感性

——「西神楽に再びホタルを」とホタル飼育研究に取り組んでいた西神楽中学校の生徒。その夢をかなえてあげたい。そして、子どもたちが豊かな感性をはぐくむ自然を取り戻してあげたい——。

中学生の活動が、地域の人々の心を動かしました。かねてからの思いを抱き、ホタルの自然繁殖する「ホタルの里づくり」を夢見ていた地元住民を中心に「旭川市西神楽ホタルの会」が結成されました。1996年、旭川市が西神楽公園をホタルの飛び交う公園に改修する際に結成された「ホタルの会」は、現在までに会員は百六十余名にも増えました。公園内に造成した2本の「ホタルのせせらぎ」を拠点に、地域におけるハイケボタルの復元活動を継続しています。

この「ホタルの里」には地元の西神楽小学校、西神楽中学校の児童生徒が、環境教育の実践の場として深くかかわっています。小中学生のこうした実践に思うことは、環境教育を行う上で、身近な自然に触れた指導は非常に有効で大切なということなのです。

小学校では毎年春に、1・2年

生の生活科の授業で、学校で飼育したホタルの幼虫をせせらぎに放流しての自然体験学習を行います。特に小学校の低・中学年の児童には、このような身近な自然での実践により学習意欲や感受性を高めることができ、また、思いやりや優しさ等、環境に対する心構えや態度も育てられるよさがあります。

中学校では3年生が「総合的な学習の時間」で実践に取り組みます。ホタルの生態研究や幼虫放流、落葉拾い清掃、毎年7月下旬に行われる「ホタル祭り」の運営に参加・協力する活動などを積極的に

行っています。中学生には、環境

問題に関心を持ち、行動力を育成するという面で「ホタルの里」での実践は大変意義があるように思います。それは、ホタルが身近な素材であることも一つですが、特に生徒一人一人が、自ら進んでホタルの会の活動に参加する経験を積み、生涯学習の基礎をつくることのできると思うからです。

中学生も運営にかかわる「ホタル祭り」は、成果を一般市民に公開するとともに、ホタルを通して自然や環境の大切さを認識し、一人一人が環境保全への実践的態度を養うことを目的としています。今では3日間で約7千人の鑑賞者



旭川市西神楽ホタルの会事務局長
坂本 征文

が広い地域から訪れ、せせらぎ上

空や木々の間を、淡い黄緑色の光を放って舞う2〜3千匹のホタルに大きな感動を味わっています。中学生たちは、この祭りの運営にかかわることで、「ホタルの会」の人々が環境保全に努力する様子、そして、ホタルに感動する鑑賞者の姿にじかに触れ、共鳴・共感することができているのです。

環境教育のベースは、世代を超えた生涯学習であり、まさに自然に対する感性をはぐくむことと言っても過言ではありません。子ども時代にしかはぐくむことのできない感性を重視した取り組みを真剣に考えていきたいものです。



ホタルの生態等を学ぶ

「ホタルの会」のホタル飼育場には毎年、西神楽中学校の3年生が訪れ、ホタルの生態や飼育、「ホタルの会」の活動等について学習しています。この施設には、会員が考察した「飼育装置」が設置されています(写真後方)。ホタルの上陸・産卵・羽化までを観察でき、約8〜10万匹の幼虫飼育が可能です。生徒たちは、学習の成果を「ホタル祭り」でビデオ発表し、鑑賞者から大好評を得ています。



ホタルの幼虫の放流

「ホタルの会」では、毎年、ホタルの幼虫放流を続け、中学生も参加しています。西神楽公園内には、30mと100mの2本の「ホタルのせせらぎ」があります。循環式の「せせらぎ」は、造成から13年目を迎えます。今ではホタルの自然繁殖はもちろん、清らかな水の流れに水棲動物や貝類、水辺や草木にはチョウやトンボなど、多くの種類の小動物が生息し、自然豊かな「ホタルの里」として市民や児童・生徒に親しまれています。

先生も深呼吸を



香山 リカ
(精神科医・立教大学教授)

うつ病などの心の病で休職する教員が増えている。教育現場からは、業務量が増えるのと比例して、子どもと接する時間が減っている、という悲痛的な叫びが聞こえてくる。子どもが関係した事件、犯罪が起きるたびに、「学校は何をやっているのか」といった批判の声も上がる。加えて最近では、いわゆる“モンスターペアレント”の問題もある。

おそらくまじめな先生ほど、「いま子どものためにできることは何か」と思いつめ、知らないあいだに心身のエネルギーが枯渇して、気がついたときには、うつ病の危険水域に入ってしまったているのだろう。

どうすればよいのか。根本的には現場の先生たちをもっと支援するシステムが整わなければ、この問題は解決されない。とはいえ、それはすぐにはむずかしい。そうすると、先生たち自身も自分で自分の身を守る工夫をしなければならぬ。

いちばん大切なのは、しんどい時こそしっかりオフの時間をキープすることだ。何も長期のバカンスに出かけなくてもよいので、1日1時間でも1カ月に1日でも、仕事から完全に離れてひとりの人間に戻る時間をすごす。スポーツ、料理、DVD鑑賞あ



イラスト ひらた ひさこ
<http://kore.mitene.or.jp/~twins7yh/>

るいは日なたぼっこなどで「ああ、気持ちラクだな」「生きててよかった」としみじみ思うことができれば、仕事の活力もチャージされているはずだ。「こんな時期だからこそスキルアップのために勉強しなければ」と休日返上で講習会に出かけるのは、頭の栄養にはなっても心の栄養には決してならない。

それからもうひとつ、自分ですぐに結果を判定しないことも大切。とくに教育では、まいた種が10年後、20年後にようやく芽を出す場合もある。「子どもがわかってくれない。だから自分はダメな教師だ」とその場で結論づけるのは早すぎる。「今は良い結果は出ていないけれど、この先はどうなるかわからないな」と判断保留することも、時には必要なのだ。

あわてないで、ゆっくり深呼吸。ちょっとしたゆとりが、自分を救い、子どもを救うのだ。

書籍紹介

流水の伝言

アザラシの赤ちゃんが教える地球温暖化のシグナル

●小原 玲 著／教育出版刊 1,575円 ●

20年間にわたってアザラシの赤ちゃんを撮影する写真家・小原玲が目撃した「地球温暖化」。未来をつくる子どもたちに、その現状をわかりやすい言葉で伝え、「わたしたちはどうしたらいいか」を問いかける。



作品募集 地球となかよしメッセージ 2009

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、写真(またはイラスト)にメッセージをつけて表現してください。

【応募期間】2009年
7月1日～9月30日

- ◎主催／教育出版 ◎協賛／日本環境教育学会
- ◎後援／環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞
- *こどもエコクラブのパートナーシッププログラムです。
- *入賞作品は、Educo2010年冬号(2010年1月発行予定)及び教育出版ホームページに掲載します。

教育出版 <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>

「地球となかよし」事務局 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 TEL 03-3238-6982 FAX 03-3238-6975

応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね

応募者全員に参加賞がもらえるよ



ほっとな 出会い

動物写真家

おはら
小原 玲さん

●報道カメラマンから動物カメラマンへ

ソマリア内戦の取材に行ったとき、人の不幸を探して回る自分の姿を自覚して、愕然としました。外国の支援が届いて、子どもの栄養状態がよくなった病院もある。そうすると、やせた子どもはどこにいるのかと聞き回る。若いときは現場にいるだけで気持ちが高揚して気がつかなくなったのですが、自分の姿を振り返って、だんだん写真を撮るのがつらくなってきた。撮られている相手が嫌がっている、自分も決して楽しくない、見た人もすごい写真だとは思いうけど、喜びは感じない。写真を撮って自分も相手も楽しい、楽しさの連鎖があるということがカメラマンになった理由だったの……。

そのころ、カナダのアザラシのポストカードを偶然見つけて、こういう写真って癒されるな、たまにはそういう動物写真でも撮ろうかな、と、本当に思いつきで撮りに行ったんです。流水の上に行ってアザラシの赤ちゃんを見たら、かわいい、かわいいなだけ。撮っているだけでうれしくてしょうがない。アザラシの赤ちゃんがあつばらな黒い目でこっちを見ていて、それだけでもう十分だと。いろいろ考えていたことが吹っ飛んだような気がしました。写真ってこんなに楽しかったんだと。自分が写真を撮り始めた原点に戻ったんです。

●流水から地球温暖化を考える

環境について考え始めたのは、動物写真家に

なつて10年ぐらいたつてからです。流水のシーズンがどんどん短くなってきて、昔のように撮れない。撮っていると氷が割れて海に落ちることがある。

でも当時、世間やマスコミは、温暖化の影響と決めつけるのは早い、エルニーニョ現象の影響で一時的なものではないか、と言っていました。現地の元アザラシ猟師たちが、いくら「絶対に氷がおかしい」と言っても、科学的・客観的な根拠やデータがないじゃないかと。流水と暮らしてきた者、流水をずっと見てきた者の感じていることを真剣に聞こうとはしてくれませんでした。

今でも大人を相手に話をすると、それは本当の話なのか、というところから始めなくちゃいけないで大変です。しかし、子どもたちは、僕が見てきた事実を素直に受け取ってくれます。アザラシの赤ちゃんが自分で泳げるようになる前に流水がとけてしまうようになり、おぼれてしまう。アザラシがいなくなると、その捕食者であるシロクマにも影響がある。こういった話



61年生まれ。群馬県立前橋高校、茨城大学卒業。報道カメラマンとして世界各地を回り、天安門事件やソマリア内戦などを撮影。その後、動物写真家に転向。日本各地のホテルや北極のシロクマ、流水のアザラシなどを主に撮っている。写真集に『流水の伝言 アザラシの赤ちゃんが教える地球温暖化のシグナル』（教育出版）など。小原玲 WEB フォトギャラリー ▶ <http://www.reiohara.com/>

に真剣に耳を傾けてくれます。小学1年生でも最近では温暖化について、知識としては結構知っていることが、かわいいアザラシの赤ちゃんの写真を見て結びつき、そこから自分たちの生活のあり方、身の回りの気候についてもいろいろ考えているようです。

●自分で感じる・考えることが大事

僕は、事実を事実であると受け止めて、そこから自分で考えることが最も大事なことでないかと思っています。考えない人間が一番怖い。報道カメラマンをやっているとき、なんて人間は頭が悪い生き物なんだろう、と悲しい思いをたくさんしました。これだけの知性をもつ「人間」が、食糧問題を解決できない、人種差別を解決できない、戦争を止められない。そこにあるのは、皆が一つの動きに乗っかっているだけの「考えていない」姿です。

ですから、僕は現実を見てきた者として、まず、こんなかわいい動物が人間と一緒に生きているんだよ、ということが伝わればいいと思っています。そこから先は自分たちで考えてほしい。そういう撮り方をしたいですね。

●「好き」が未来を考える力に

今、年に50回ほど学校などで講演をしています。一番うれしいのは、子どもたちの感想の中に「好き」という言葉がいっぱい出てくることです。アザラシの赤ちゃんがかわいくて好きとか、シロクマのおしりが大好きですとか、海一面の氷がきれい好きですとか……。そういう子どもたちがいるかぎり、多くの問題は解決すると思つし、そのことに希望をもっています。「好き」と感じる心が、今の時代に何が必要かということを考えていく原動力になると思っているんです。

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

◆香山リカさんのコラムを読みながら、教育こそ子ども一人一人の平等性を保障する営みだと改めて思いました。コネ、カネと縁のない、それぞれの子どもの自己実現を支援していきたいものです。(兵庫県・山口芳弘) ◆奥川元子さんのフィンランドの教育の紹介、参考となりました。「時間も手間もたっぷりかけて子どもを育てる」は重要な指摘です。(東京都・羽豆成二) ◆巻頭の池辺晋一郎さんの、音楽への親しみ方、学び合いのよさを味わえる活動展開は、音楽が苦手の教師でも協働でできる楽しみにあふれている。ぜひ参考に取り入れてほしいと思う。(埼玉県・斎藤有雄) ◆「地球となかよしメッセージ2008」の入賞作品に感銘を受けました。とりわけ、海に関する作品に注目しながら、海洋国日本について考えたいものです。(山形県・佐藤 進)

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のいのちと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。